



小傳

生まれたのは大阪で、明治二年の春、家は代々醫、其修業に十三から郷を出たが、一轉政事に志し、再轉文學に入り、遂に家を出て京都に獨修する中、一日建仁寺の門を過ぎ、それが元重盛の館のであつたとしてあるのを見て其悲劇を書く感興を得たのが戯曲創作の始、東京へ出て公にしたのは明治二十九年。それより先二十二年に敘情詩を作り出し、二十六年始めてイブセンの社會の敵と人形の家を譯して京阪の雜誌へ出し、三十四年單行本にまとめた。三十一年からまた京都に寓居、三十五年南座にシエクスピアのリヤア王飜案、闇と光、自作月照を出したのが舞臺上演の始、續いて大鹽平八郎を夷谷座と大阪辨天座に上場。同年樂劇、後の羽衣を公にしたが、未實演の運に至らぬ。三十六年江戸城明渡を東京明治座で出したので東上したが、時未到らぬと見て歸西、三十八年同篇を大阪角座で、ユゴーのミゼラブル飜案を朝日座で、舞踊劇、盆踊都風流を京都明治座で、櫻時雨を南座で出した。同篇を更に淨瑠璃につゞつて大阪の堀江座で出したのは三十九年、東京明治座で出したのは四十二年、それを機として東に移つた。小説魔の曲を出したのは四十四年、其外種々計畫したが意の如くならず、大正五年からそれまでの著作をまとめて先づ東西文學比較評論を出し、次で脚本、詩、文集を出した。七年江戸城を歌舞伎座で、八年關ヶ原を帝國劇場、京都南座で出した。十二年震災に促がされて大阪に移り、先づ福神舞を中座で出した。今や畢生の力作に着手、完成の上は更に其後の諸作もまとめるつもり、遂にどこの土となるか、おのづから一所不住の生涯を送る。

上演年表

- | | | | | |
|---|-------|------------|-------|------------------|
| 一 | 江戸城明渡 | 明治卅六年六月初演 | 於明治座 | 川上音二郎、高田實等に依つて |
| 二 | 櫻時雨 | 明治卅八年十二月初演 | 於京都南座 | 片岡仁左衛門、中村芝雀等に依つて |

跋

江戸城明渡は私に取つては殊に深酷な思出のあるものである。手をつけたのは京の三本木、松菊が隠れた藝者屋のあつた瓢箪路次にゐた時、其前月照を南座で出して意外に成績が好かつたので、次にこれをとると思ふと、飛込んで来たのは川上音二郎であつた。彼も西洋から歸つて一旗擧げようとした所、これで歌舞伎派の根城を抜かうとした、其武器としたのは「自然」しかし私はそれ程自然派で無かつた。されば先づ作意と演出方と一致せぬ所があり、新派の精銳を集めた一座の諸優も強て統一したが、姿勢と品位を缺いて殆比類少ない大攻撃、中にも歌舞伎派の重な人々が公に激烈な打撃を加へたので、川上等は反撃し、それではそちらでやつて見よといふ、それにはたち／＼となると、横から飛出したのは伊井蓉峰であつた、しかしそれは餘りに小勢であつた。川上は更に鴈治郎に勧めると、魁けたのは片岡我當であつた。これも其平生から見たら一飛した自然的演出であつたが、しつめた姿勢の整頓で前ほどの打撃を受けなかつた。其後十幾年、やつと東京の歌舞伎派が立上つた、彼等もいつもの型を離れたが、丸で自然でも無く、傳統の素養は陰然有效であつた。いかに老朽しても傳統を破壊して、丸で新しい藝術を成立たせる事は國民性からしても不可能、しかも其儘は踏襲せず、新な精神で活用する必要をつく／＼感じて、私の作意

の方針も定まつた。第五段は近年全く作り變へたので、私の努力もあの頃の志士の様に空にならなかつたら幸である。

櫻時雨はそれで一轉して、しかも新しい精神を吹込んだものである。見た所傳統的技術を用ゐるが、丁度男主人公が茶碗を叩き割る様に、其儘の繼承で無く、風韻のみを收めて、それに私の内部生活が殆ど無意識に象徴された。されば舞臺では技巧上紹由がシテを取るが、作意からは三郎兵衛の魂が眼目であらねばならぬ。これは私の物で最多く出されたが、此魂を濃く印象するものはまだ未來にあらう。

高 安 月 郊

大正十四年二月一日印刷
 大正十五年八月一日再版
 大正十五年八月五日再版發行

現代戲曲全集
 第三卷



著者

發行者

印刷者

印刷所

發行所

(非賣品)

松居松翁
 高安月
 山崎紫
 伊原青々
 岡鬼太郎園紅

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

中塚榮次郎

東京市下谷區二長町一番地

守岡功

東京市下谷區二長町一番地

凸版印刷株式會社

東京市麴町區內幸町一丁目六番地

國民圖書株式會社

電話銀座二一八八番
 振替東京五二二九八番